

私は、終戦の翌昭和二十一年六月十八日、内地帰還のためレンパン島を出航、七月六日、鹿兒島港に帰り、陸軍伍長として復員した。

戦後、通信隊の戦友会は、全国各地からの集まりで「戦友」という本を作って資料として配ったり、戦友会を各地持ち廻りで催している。また、内原訓練所関係の交流は、二年に一度やっていたが、高齢者が多くなり、今は打ち切って、思い出の文集にしてある。清
明村開拓団の人々は、ソ連参戦等で随分苦労したが、最後の引き揚げは昭和二十一年七月頃とのことなので、私がレンパン島から復員したのと同じ時期という。期せずして、北と南から内地へ帰還したわけです。
私は青雲の志を懐き、築土建設と民族協和のため、加藤完治先生を慕って満州へ渡ったことを忘れない。そして、犠牲となられた多くの開拓者の御冥福を祈ることを忘れておりません。

満州の衛生兵勤務

— 兄の遺児も幸せに —

滋賀県 西 岡 敏 夫

私は昭和十五年徴集、滋賀県甲賀郡甲南町で、大正九年十月九日に生まれました。父は小学校五年生の時、母は中学二年生の時死亡し、長兄は第十六師団、フィリピンのレイテ島で戦死、次兄は満州旅順で抑留し十二年四月に復員、私は三人兄弟の末弟の三男でした。
昭和十六年三月六日、現役兵として宇品港を出航、満州黒河省の瑗瑗に着いたのは三月十二日で、第六国境守備隊第二中隊に歩兵として入隊しました。一期検閲終了後衛生兵に転科、教育は瑗瑗陸軍病院で三か月間、衛生兵教育は看護婦並みで、三か月間に短縮されたので、夜も寝られぬ。寝ていると教育係に叩き起こされるなど厳しいものでした。ほとんどが学科で、その日の講義はその日のうちに試験する。教官は軍医で、

教育が終了すればそれぞれの隊付衛生兵になる。

満州は三月でも雪が降り、全部融けるのは七月に入ってからで、初雪は八月末から九月初旬、一年中殆ど冬というわけである。耐寒演習が重点で、本科はスキーを履き射撃訓練、冬の気温は零下四十度ですが、風が吹くから体感温度は零下五十〜六十度となる。

夏になると逆に四十度になるが、湿度が低いのでサラッとしている。真夏の日没は夜十時、日の出は午前二時頃、冬は反対、国境の黒竜江の向こう側はソ連領、両軍共江岸に望楼があり相手を監視し続けている。

兵隊の病気は胸部疾患や凍傷が多い。呼吸器病は殆ど一等級で、気管支炎の者が多かった。凍傷は自分の不注意が多いため二等級でした。

満州には昭和十九年七月までいたが、その間は耐寒、渡河訓練で牡丹江まで行ったが、永久地下陣地にはほとんどこもり切っていた。戦車壕掘り、トーチカ作りの作業が段々と多くなった。その間三年半近く、隊から一步も他部隊には出なかった。そこで伍長に任官し、その後は九州の第六航空軍に転属になった。

衛生兵の勤務について話をしてみるが、歩哨、不寝番、使役などの一般勤務は無い。点呼の時は、週番士官、下士官の後について兵隊の健康状態を見る。一日の業務内容を衛生日誌につけて中隊長、人事係准尉に提出する。それが私の日課である。その間、兵隊で弱い人、頭の弱い兵隊にかさにかかっていじめる古兵もいた。緊張したり、叩かれたりすると小便を漏らす者もいた。

関東軍も昭和十八年二月頃から、ポツポツ南方などへの転属が始まり、特に現役兵が段々と転属していった。「ト号演習」などの名で出ていったのだが、代わりに補充兵が入って来た。最強といわれた関東軍も現役兵だけではなく、兵力が低下していった。重機関銃はあっても、砲はほとんど外へ転出したのか、丸木に色を塗って砲に見せかけたものに代えたものもあった。野戦重砲なども、大東亜戦争が始まる前に南方へ転出させていった。対ソ戦が南方へと変わりつつあった。

このように満州の状況も変化していったが、守備隊の衛生兵と住民の状況について述べてみます。現地の

住民は一般の兵が来ると皆逃げて家に隠れてしまいが、我々衛生兵の赤十字のマークを見ると、皆出て来て薬を貰いたがる。

住民の胸部疾患は熱発とか顔色で判るが、内服薬は余り使えないのでビタミン剤などを与える。外傷は赤チン、軟膏、歯磨粉などで癒るので、外用薬はふんだんに使うことが出来るから住民には喜ばれる。

そのためか、現地人の運動会や遠足には、現地民から招待やら要請を受けて、ついて行ってやった。先生や村長などとは面識があり、お目出たなど招待を受けることも多い。

宣撫とか住民との理解のためには衛生勤務が一番で、この施しは有効だった。そのためか、慰霊巡拝に行った戦友から「お前に会いたがっていた住民がいた」と聞かされた。「病気を癒してもらった木村先生」と言っていたぞ、とのことで、私は原住民に悪いことは全然しなかったし、慕われていたと思う。当時卵など「進上」と言って貰ったし、転属する時は姑娘から刺繍したハンカチを贈ってもらったこともあった。自分

が転属するなどをこちから言ったこともないし、知らされたこともなかったのだが。

九州の第六航空軍へは部隊から本科の兵と共に二十名ぐらい転属した。ハルビンで団結式をやったのだが、飛行場造りの航空基地設定練習部教育隊の隊付となる。この隊は後に第三十飛行場設定隊となった。

昭和十九年九月、奄美大島から沖繩へ行き、飛行場を作るべく出発準備をしたが渡れなくて、九州に留まって都城、鹿兒島などで青戸飛行場等作り、また官崎に帰り小林で飛行場を造っている時終戦になった。

第三十野戦飛行場設定隊は四個中隊あり、第四中隊は車両隊、他は手仕事の土方作業、それに勤勞奉仕隊、挺身隊が応援に来てくれたが、終戦時と終戦後の状況を次に述べてみる。

終戦の時、部隊は作業に出払っていて、私は小林の或る小学校の宿舎にいた。八月十五日、陛下の玉音放送を聞いた。聞いたのは校長と私との二人だけだった。放送の内容は良く判らないが、どうも負けたのではないかと思ひ、現場に行き副官に言ったら「陛下が放送

するなどない」と叱られた。

設定隊は一個大隊で隊長は少佐だった。最終的には第六航空軍から指令が出て「航空関係は捕虜か金抜きになるから、兵器を何処かへ隠し、階級章や書類も全部焼却せよ」と。軍の秘密兵器防疫給水器（水を素焼きの筒中に圧力を加えて入れ浄化するもの）の処分を命ぜられ、古井戸を見つけてその中に捨てた。

私は七月一日付で軍曹に任官したが、八月十六日、兵隊は除隊させ、私は八月十七日、満期除隊となった。大阪の人と一緒に、米軍に会っても生活出来るように、食料を持って山の中へ入っても困らぬよう、自動車に燃料を入れ、準備が出来た者から逐次出発した。しかし軍医から「お前はこれを軍司令部へ渡せ」と書類を預かって、中佐副官にこれを届けたら、「玉音放送は嘘だ、お前は国賊だ」と、車の鍵を取り上げられてしまった。

これを見ていた軍医部の曹長が「副官は逃げるのに車が欲しかったのだろう」というので、副官の言うことを聞かずに私は逃げたが、門司で関門海峡が渡れな

くなっていた。そのため食料等を車に積んだまま、持てる物だけ二人で持って、門司から無蓋貨車に乗り山陽線で帰っていった。

広島には八月十八日く十九日で、一晚貨車の中で泊まった。水道管が破裂していて、夏だったので喉が乾いていたのでその水を飲んだ。そのためか、体ははれて湿疹が出来て半月ぐらい困った。原爆のためか、石炭の粉塵のためか判らないが仲々癒らなかった。

その時は広島に特殊爆弾が落とされたことを知っていた。原爆投下から十日ぐらいたっているが、河原で青い火が見えた。丁度銅を焼いたような色の火が、あちこち点々と燃えているようだった。

八月十九日、駅へ降りたったのは十五時頃だったか、家までは六キロぐらいあるが、その間戦争に負けて恥ずかしく、人目につかぬよう、駅近くの知り合いの家に隠れるようにして休んで、日が暮れ人目につかぬようにして家へ帰った。

家には、兄嫁と子供三人がいたが、その時は兄の戦死公報は入っていなかった。その後兄が帰る迄はと、

兄嫁を助け農業をやっていた。養子になることに決まっていた叔母から「早く家に来てくれ」と言っていたが、「秋の収穫が終わるまで待ってくれ」といって兄の家の手助けを続けていた。

十月になって、兄の戦死の公報が入った。兄嫁は可哀想だった。十歳を頭に三人の男の子がいた。私は農業だけでなく新作りまで手伝ってやった。兄嫁の親元は幸いに同じ部落だったので、随分実家から援助してもらっていた。労働的にも経済的にもだ。その時、嫁を貰うなら近間の人がいいなと思った。遠い親戚より近くの他人というが、まして親戚なら余計いいと。私の旧姓は木村だが叔母は西岡で駅に近い所。私が兵隊へ行っている時「養子に行くことを承諾せよ」という兄からの手紙が来た。私は「今の時だ、何処で死ぬか判らぬから、生きて帰ったらの話にしてくれ」と手紙で返事を出してあった。その兄が死に私が生きて帰ったわけです。

西岡家では農業をやっていたが、私は農業の経験がなく随分勉強しなければならなかった。本を読んだり

し、手始めに有畜農業を始めた。この部落の氏神様が「牛を飼っていかぬ」という風習があって「牛を飼うと神のたたりあり」といわれた。農地には限界があるが、牛を飼うには限界はない、多い時には三十頭も飼った。

産まれた仔牛を兄の子にやり、有畜農業をやってみるといい、それを足がかりにして、甥は私以上に成功するという良い結果をみた。兄は中支・台湾・比島と三回召集され、レイテ島で戦死した。兄は部隊本部の書記をしていた、戦後部隊長から戦死の状況の手紙を貰ったことは忘れられない。兄は家に残した子供たちが立派に成長し跡を継いでいるので草葉の陰で喜んでいることと思えます。